

応用行動分析学に基づいた 知的障害のある子どもへの効果的な読み指導 ～いつ、何を、どのように教えるか～

文字が読めることはQOLを高めると考えるが、知的障害があると読みの習得に困難が予測され、より効果的な方法で学ぶことが求められる。しかし個別性の高さや学びにくさから、学校現場では読み指導を「いつ、何を、どのように」行えばよいのかを判断することが難しい。そこで本研究では行動分析学における「刺激等価性」という枠組みを使ったこの20年間における研究を中心に展望することとした。

(1) 見本合わせ課題

何らかのものを見本に合わせる課題のことで、応用行動分析学における「行動」と同じ枠組みにあてはめることができる(図1)。これにより音声、文字、絵といった物理的な類似性のないもの間に等価な関係を作ることができる。

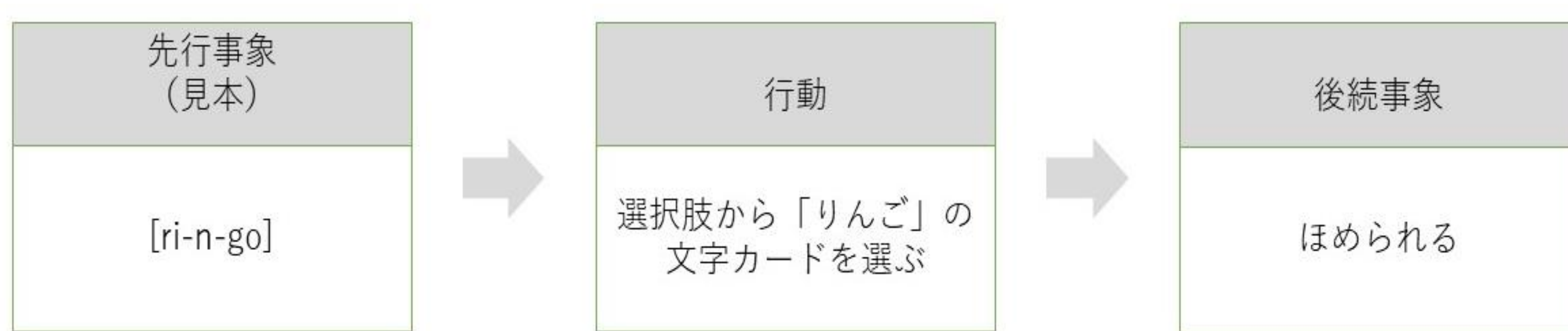


図1 見本合わせ課題の基本的な手続き

(2) 刺激等価性

等価関係が複数成立すると、直接指導していない刺激間にも派生的に等価関係が生じることがあり、学習時間を節約することができる(山本,1992)(図2)。

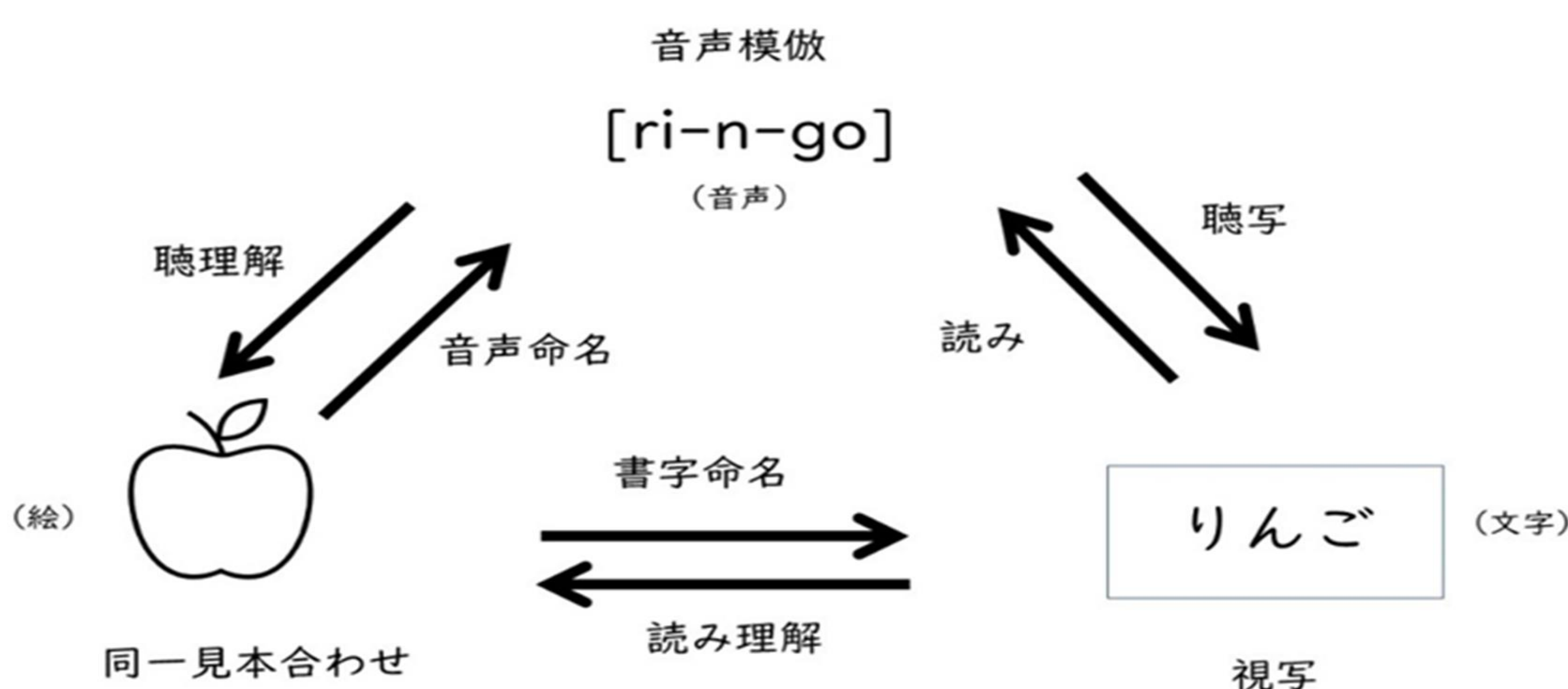


図2 単語の語意の獲得における文字-音声-意味の三者関係 山本(2009)より作成

(3) 刺激等価性の枠組みを使った先行研究

Sugasawara & Yamamoto (2007)、丹治・野呂(2010)、丹治・野呂(2012)は、構成反応見本合わせ課題(見本の単語に対して対象となる文字を選択していく課題)を使ってひらがなやカタカナ、

濁音の読み指導を行っている。野田・豊永(2017)、Omori & Yamamoto (2013a)、石塚・山本(2019)は、刺激ペアリング手続き(音声・文字・絵など2つ以上の刺激を時間的に近接させて対提示することで刺激間の等価関係を成立させる方法)を使った漢字やひらがな単語の語読み指導を行い、般化もみられたことを報告している。これらの指導は全て対象児が絵を見て命名できる語が使われた。またほとんどの指導がPC画面を使って行われた。

まとめ

先行研究から刺激等価性の枠組みを使った指導の有効性が示された。対象児は音声模倣、聴理解、音声命名ができたことや、指導に使用する単語は対象児がその意味や使い方を理解している語であり、これは指導の開始時期や内容の目安になると考えられる。また刺激等価性の枠組みは対象文字の読み方だけでなく、般化による「方略」までも教えられることが示された。さらにICT機器は正確で安定した刺激を提示できることや作成が比較的容易であることなどから活用が期待されるといえる。先行研究はいずれも学童期の子どもが対象だったので、今後は中学部、高等部の生徒での効果を検証したい。